

「雑種文化論」と「土着の世界観」

——『日本文学史序説』を中心に——

—— 研究ノート ——

The Hybrid Culture Theory and the Weltanschauung of indigenous: on A History of Japanese Literature

劉

争

キーワード：雑種文化、古層、日本的なもの、外来思想、此岸的性格、
現世主義、集団主義、忠誠、自我、土着の世界観

要 旨

加藤周一は、「雑種文化論」で日本および世界に注目された戦後日本の代表的な思想評論家である。加藤周一は生前に何度も中国を訪問した。抽象的な「雑種文化論」を具象化した加藤周一の著作『日本文学史序説』は、中国多くの大学に日本文化の教科書として採用された。近年、中国でも日本思想を研究する学者が増える中、加藤周一の核心に迫る段階に近づいてきている。筆者は日本の加藤周一研究と中国側の研究視座を比較し、多面性のある加藤周一思想の意義を再考したい。

本稿はまず加藤周一の「雑種文化論」と同世代の丸山真男の「古層論」を比較し、両者の思想の共通点と相違点について考察する。次に、加藤周一の生涯とその思想について研究成果を考察する。最後に『日本文学史序説』において加藤周一の追究したキーワードである「土着の世界観」を考察する。

1. 「雑種文化論」と「古層論」

加藤周一と丸山真男、同世代の二人は、各々「雑種文化論」と「古層論」で戦後の日本の思想と文化構造にメスを入れた人物である。二人は政治的立場が近く、互いが「対話する相手」であり、二人は「日本的なもの」の探求の道を共にしてきた良き友人、仲間である。したがって両者の言論は補い合うものが多く、同調するものが多いが、しかし両者には看過してはならない決定的な違いがある。

加藤周一は1955年から1960年まで一連の日本文化論を発表したが、その中心となるのは「雑種文化論」である。特に「日本文化の雑種性」、「雑種的日本文化の希望」は日本文化の具体的な考察である。「雑種文化」という表現は西洋の「純化文化」と対照的に使った言葉である。この言葉だけで見た場合はマイナスのイメージが強い言葉であることは日本も中国も変わらない。しかし、加藤は雑種文化に肯定的な意味合いを持たせている。この点については後の彼の「日本文化の純粋化運動」批判にも繋がる。加藤は「日本種の枝葉を落として日本を西洋化する」

ことと、「西洋種の枝葉を除いて純粋に日本的なものを残したい」ことの両方を共に反対する立場である。日本種と西洋種の共存する状態が雑種文化であって、日本文化の特徴である。この時の加藤は主に日本と西洋の関係において雑種文化論を掲げたのである。しかし雑種の対照要素は西洋だけではない。加藤が雑種文化論の後に書いた壮大な『日本文学史序説』を見れば、日本種の中にはもっと早い段階の外来種として中国種を含めていることがはっきりと表れている。

一方、丸山真男は1972年に「歴史意識の「古層」」という論文を発表し、「古層論」を誕生させた。丸山は『古事記』『日本書紀』の冒頭の言葉「なる、なりゆく」「つぎ、つぎつぎ」「いきほひ」という三つの言葉様式を「基底範疇」と呼び、これらが日本の思想様式の発想に由来するという。そうした日本の歴史意識の内側に響き続ける「持続低音」が「歴史意識の古層」であるという。加藤周一は丸山の古層論が自分の考えとほとんど同じであるという。加藤は日本人の世界観について自らこう語る。

「それを私は「ベクトル」という概念で説明した。丸山真男さんはそれを「古層」という言葉で表現し、後に「バツ・オスティナート」と表現した。「古層」というときに「古い」というといつの時代か問題になるから、それよりも構造上の基底になっているものに着目して、それがあらゆる外国のイデオロギーの変化を引き起こすというふう考えた。バツ・オスティナートというのは、持続する低音があり、楽器でいえばコントラバスですが、その上の高音部をメロディーが流れるのだけれど、ただ単に低い音が続いているというだけではなくて、それとの関係においてメロディーが展開されるということもふくまれていると思う。だから、「バツ・オスティナート」のほうはただ「古層」というより正確かもしれない。私が「土着思想」といったのはほとんど同じことですが、われわれが特別の関心があったことの一つは、「古層」とは、「バツ・オスティナート」とは、あるいは「土着思想」とはいったいどういうものであったかという疑問に答えなかったのです。」[加藤周一、『日本文学史序説』補講、2012、ページ：307]

加藤周一は丸山真男のどの言葉が正確かというよりも、共通関心のあることを言明したのである。加藤周一の場合は早期に「雑種文化」という言葉で表現したのだが、晩年になっては「土着思想」で表現するようになった。この「土着思想」は加藤周一の思想を考えるのに一番大事なキーワードである。

しかし、加藤周一と丸山真男は同じ関心を持つ同士でありながら両者の違いも明らかである。例えば、加藤周一は古層論について丸山真男と対談したときの発言がある。

「“なる”のほうは、だから時間的には「いま」の世界になるし、空間的には「ここ」の世界、日常的現実の世界になるわけですね。」[『日本の思想6』、1972]

これに対して丸山は空間を日本の風土として捉え、「なる」はそれには結びつかないものだと断定した。このやりとりからわかるように、加藤のこの独自の視座こそ丸山真男との決定的な違いである。「時間と空間」へのこだわりは加藤周一の持論「雑種文化論」を支えるテキストとして、雑種文化論を具体化した代表作『日本文学史序説』にも表れている。

加藤周一は自ら『日本文学史序説』で「日本文学の特徴について」五つの特徴を挙げた：一つ目は文学の役割について、中国と日本の文化の違いを指摘した。中国は包括的体系への意志があるが、日本化の内容は包括的な体系の分解であり、形而上学的世界観の実践倫理と政治学への還元ということであった。二つ目は、歴史発展の型として、一時代に有力となった文学的表現形式は、次の時代にうけつがれ、新しい形式により置き換えられるということがなかった。新旧が交替するのではなく、新が旧につけ加えられる。そのどれ一つとして、後から来た形式の中に吸収されて消え去ったものはない。美の理想はそのまま時代と共に滅び去ったのではなく、次の時代にうけつがれて、新しい理想と共存した。三つ目は言語表記について漢字が日本語の表記に用いられた。表音文字と表意文字の工夫とその併用。四つ目は社会的背景について、日本文学に著しい特徴の一つは、その求心的傾向である。作者も読者も大都会の住民、題材は都会生活である。中国は一時代の文化が一つの都会に集中しなかった。欧州の文学ではその遠心的な傾向がさらに徹底している。文学者集団へ組み込まれるこのような傾向は、日本文学の素材を限定した要因である。つまり集団主義である。五つ目は日本人の世界観について非常に現実主義で、現世主義であるという。

さらに加藤は以上の特徴の中で五つ目の「世界観」の特徴が一番重要であると強調した上に、五つの特徴が相互に作用し、関連しあうと指摘した。これに対して、海老坂武はこう指摘する。

「しかしこうした関連づけは特徴のすべてについて行われているわけではない。特徴のすべてを関連づけるには包括的な体系を立てる必要がある。日本文学史を書き日本美術史を書いたあとの加藤は、日本文化全体を統一して理解するためのこうした体系を立てることを志した。その基軸として選んだのが「時間」と「空間」である。」[海老坂武, 2013, ページ：194]

この「時間」と「空間」は『日本文学史序説』では「今＝ここ」という表現で表された。海老坂氏が指摘した通り、「いま」は時間の一部分であり、「ここ」は空間の一部分である。「ここ」主義はムラの空間秩序を結び付けた集団主義と関連し、「いま」主義はつまり、現在主義なのである。そして、「ここ」と「いま」両者の関係について「全体を分割して部分へ向うよりも、部分を積み重ねて全体に到るという同じ現象の両面」[海老坂武, 2013, ページ：195]であるという。

つまり「いま＝ここ」「時間＝空間」「部分＝全体」こそ、加藤周一が日本文化全体のために建てた統一したものである。これは『日本文学史序説』における「土着の世界観」が象徴したものである。

アジア諸国は日本戦後思想界の動きに大変な関心を寄せている。しかし、ファシズムとの関連性を考察し、「超国家主義」など近現代史的な立場に立脚し、比較的明快な論旨を展開する丸山真男の早期の論説は人気を博しているのに対して、一時代一地域に限らず全時代を網羅する通史的な分析を加え、「前の事実を踏まえて後の事実の生じる一筋の流れ、発展を明らかにしよう」（『日本文学史序説・序』）とする加藤周一及びその壮大な試みはそれほど注目される存在ではなかった。生前に幾度なく中国を訪れ、各地で精力的に講演をこなし、数多くの中国人学者

と交流を重ねてきた加藤周一は、共産党機関紙の『人民日報』にも取り上げられるほどそれなりに知名度をあげたが、彼がいざなう「日本の土着世界観」への探求に足を深く踏み入れた研究は残念ながらさほど多くない。

その中で、中国人知識層における加藤周一の存在を理解するためには、まず『日本文学史序説』を中国語に翻訳し、加藤と何度も長時間の対談を交わした元中国社会科学院教授葉涓渠の加藤周一論を取り上げたい。当時の彼は加藤についてこう評価する。

「早期の加藤先生の著作は日本文化と西洋文化を比較して、戦争中に強調された天皇制絶対主義をはじめとする封建主義思想に対する強い批判を行いました。同時に、伝統文化を封建文化と同一視したり、西洋文化を民主主義と同一視したりもしました。伝統文化を大部分否定し西洋文化を全般に受け入れることを一度提唱されました。しかし、ヨーロッパ留学後、自分の視点を修正されました。というのは、片方の目が西洋に向き、もう片方の目は日本を含む東洋に向くようになってきました。西洋技術文明と民主主義の普遍意義を肯定し、伝統文化の特殊意義を認め、日本の伝統及びその再創造が不可欠であることを自覚認識しました。さらに、日本伝統文化と西洋文化両者の衝突の中に、調和、融合できる接点を探るようになりました。」〔葉涓渠, 2000〕

葉氏は加藤が言う「(歴史を牽引する)力の主体は土着の世界観」を伝統文化への肯定として受け取る。また「民主主義+技術文明+伝統文化」という近代化モデルの独創的理論意義があると指摘し、そのモデルは発展途上国の近代化の実践にも活用する価値があるという。

更に葉氏は『日本文学史序説』が日本文学史だけではなく、中国学術界が文学史、学術史の見直し、書き直しに対しても現実的な意義があると考えた。

一方で、加藤周一に対する中国識者の解説もすこぶる表層的なものに留まっているといわざるを得ない。「雑種文化論は日本文化が日本と西洋の混合物であるとする議論で、加藤は、それを様々な外来文化の要素が乱雑に存在する状態であると定義するが、そのような見方に賛成できない」という見方が多い。

しかし、近年の日本研究が中国でより深いものとなり、新しい動向が見られてきた。『現代思想』が加藤周一の総特集を刊行した同じ年2009年に、孫歌は『文学的位置』を上梓した。この本は東アジアの課題が中心で、丸山真男の章節の中にわずかながらも留意すべきものがある。もとより、この著作のメインの研究対象は丸山真男であるが、丸山を理解するための補助線として、孫歌は『日本文学史序説』を取り上げ、「大胆な試みをなされた」と加藤周一に賛辞を送った。その理由は、日本文学と日本思想が無関係であるとの仮想を打ち破り、思想やイデオロギーにおける文学の役割を認めることによって、「日本特殊論」を固持する国文学界に衝撃をもたらすばかりか、国文学の外に排斥されてきた思想家の調査範囲を文学という聖域に拡大させた、ところにある。

しかし、加藤一個人では日本文学研究の閉鎖的現状を変えることができないと孫歌は同時に指摘する。孫歌は『日本文学史序説』の歴史の構成は思想観念論的などころがあると指摘し、「作家—作品」の構造において「思想観念変遷史」の意味合いがあると指摘する。これは丸山真

男にとってまだ物足りなく、さらに日本文学の核心思想観念の歴史構造の関連性を追求したいが、この期待は加藤周一の限界を超えたと指摘する。

さらに、孫歌は加藤周一の思想観念変遷に対する注目は思想そのもののパラドックスを証明したという。それは各時代の思想がそれぞれの時代に対して反応すると同時に、時空を乗り越えて「意味転換」の機能も含めなければならないということである。つまり、ほかの時代或いは別の文化背景において再生できるものでなければならないということである。

1949年新中国が成立して以来70年余りの歳月を経て中国の識者はようやく儒学の精神面での探求を始めた。John Whitney Hall（约翰惠特尼霍尔，2013）が指摘したように、儒学と西洋文明と適度な距離を保持してきたからこそ、日本は自主的な判断を行い、それらを選択的に吸収することができた。ようやく伝統儒学との距離に気付いた中国は今こそ加藤周一の文学思想をもう一度本格的に考察する時が来たのである。これは『日本文学史序説』を再解説する筆者の立つ出発点でもある。

2. 加藤周一の生涯と思想

加藤周一（1919-2008）は東京府立第一中学校、第一高等学校を経て、東京帝国大学医学部に進学する。医学生生の傍らに、大学時代にフランス文学研究室にも出入りしてフランス文学などに酔心し、理系ゆえの緻密さや合理主義に基づく幅広い文学的素養や見識を身につけた。そのため、戦時下でも常に「戦争」の不合理性に炯眼を光らせ、加藤は神国の狂信主義から冷静に距離を取っていた。戦後は最初の本『1946：文学的考察』（中村真一郎・福永武彦と共著・真善美社）を出版し、戦争を痛烈に批判した。一九五一年に加藤は念願の医学留学を実現したが、フランスに在留していた間、医学のみならずフランス文学、ヨーロッパ美術、音楽、演劇、そしてヨーロッパ思想についてもひろく学び、中世と現代の関連性、思想と文学の関連性に深く関心を寄せた。西洋文化の刺激を受けた加藤は日本文化を戦後日本社会の立て直しに豊饒な土壌として機能させるためには、表層のみならず、その核心に迫る新たな視点からの接近や解説が必要だと痛感するようになった。一九五五年に帰国した加藤は、一連の著作を通して「雑種文化論」をつむぎだした。「超国家論」を主張する丸山真男、「共同幻想論」を唱える吉本隆明と並んで、加藤周一もいよいよ戦後日本のありかを模索し、その行方を方向付ける「知の巨匠」の一人として知られる。彼の戦争の本質を内省的に洞察するうえで、日本文化の原点への再帰が不可欠な通過点であるとし、そこから一億の日本人が戦争に自ら身を投じる原因を見出す作業に情熱を燃やしている加藤周一は、戦争を経験した同世代の「良知のある」知識人の代表格である。その後、加藤は一九六〇年から六九年までカナダのプリティッシュ・コロンビア大学で教鞭をとったが、そこで約十年間にわたり日本文学史や美術史について研究を続け、その蓄積が一九七〇年代から八〇年代にかけて著した『日本文学史序説』や『日本 その心とカタチ』で開花した。晩年の加藤は「九条の会」の活動に献身的に参加した。2008年に辞世するまでの生涯にわたり、加藤は文学、芸術、政治、社会、思想など多岐にわたる領域に涉猟し、日本文学史だけでなく思想史にも大きな足跡を残した。

日本では加藤周一についての研究がから行われており、彼が逝去した後でもその膨大な言説はいまだに昨今の日本思想の核心を迫るうえで示唆的な手がかりを提供し、新たなスタートを切るためのエネルギー源として機能し続けている。

加藤周一とその著作を対象とする研究は、加藤が最初の著作を世に送り出した翌年に、『近代文学』に発表された荒正人の論文である。それを皮切りに、2015年に成田龍一の単行本が発表されるまでの半世紀以上の間に、実に様々な研究が行われてきている。加藤の世界に傾倒した知識人のリストに、竹内好、吉本隆明、鶴見俊輔、柄谷行人、大江健三郎など錚々たるメンバーの名が連なっている。

今まで蓄積されてきた膨大な研究成果の中で、加藤周一の思想を考えるうえで近年最も参考価値が高いとされている海老坂武、鷺巣力、成田龍一、の三者の議論に注目する。海老坂武は「時間と空間」「言葉と精神」に、鷺巣力は「理と情の二面性」、「価値相対主義」および「美をめぐる精神の往復運動」に、成田龍一は「戦後日本知識人としての加藤周一の思想」にそれぞれ注目の焦点を当てる。

まず、言葉がそれぞれ違いながらも加藤周一の精神的なものに注目したのは海老坂武と鷺巣力である。言葉や理屈など形式的なものを通り越して、表象的な言葉溢れる歴史の海に潜り、海流の方向を体感し、本質的な原動力を発見しようとする強い意欲が加藤周一の体にある。まさに歴史の時間と空間を乗り越えた壮大な試みの目的は一つしかない。それは共通するものの発見である。二人はそのような加藤周一の普遍的なもの、精神的なものへの追及をそれぞれどう見たのだろうか。

海老坂氏は加藤周一が残した膨大な言葉を注目した。『加藤周一著作集』二十四巻、『自選集』十巻、更に多くの講演集、インタビュー集がある。二十世紀日本の言葉の歴史の中で、加藤周一は小林秀雄、吉本隆明、鶴見俊輔よりも幅広い分野で多くのテーマを扱った。[海老坂武、2013]

海老坂氏は加藤の仕事全体の中で最も重要なのは日本文化の全体の形を描き出したことであるという。

「第一に、彼は日本文化の全体の形を鮮明に描き出した。雑種文化論に始まる〈日本的なもの〉の探求は、加藤が後半の人生でもっとも多くの時間とエネルギーを費やした仕事であり、文学と美術作品検討を通して彼が引き出してきた日本文化の特徴は、それをどう説明するかは別として、否定しがたいものとして私たちの目の前に挙げられている。」

加藤周一の青年時代は重苦しい時代の雰囲気、「国民精神総動員」「大東亜共栄圏」「殉国精神」などのような国家スローガンに圧迫された時代であった。加藤周一はそのような非合理主義に対して「つじつまの合わなさ」に気付き、合理主義を以って反撥する。加藤が若い時に書いた一文「日本の精神は不合理な何ものかであり、文明は非人間的な何ものかである」（「焼跡の美学」）を引用して、海老坂氏はこう指摘する。

「不合理性、不人間性、封建性、これが日本の精神なのである。しかし、〈日本的なもの

の>とは、はたしてそれだけなのか。戦争中の加藤青年は文楽を愛し、能を愛していたのではないのか。それは<日本的なもの>ではないのか。[海老坂武, 2013, ページ: 38]

加藤周一の<日本的なもの>への探求について『日本文学史序説』の最大の特徴であると言う。

「外来の体系の「日本化」は、一つの特徴としてあげられているというよりは、この日本文学史を書いた加藤周一の基本的視点を語っているということだ。言い換えれば、「わたしはこういう視点で日本の文学を読んでいますよ（読んできましたよ）」ということをおおむね宣言しているのであり、冒頭のこの一文は日本文学史のための<方法序説>として受け取ることができる。事実、この視点は奈良時代から現代にいたるまでの千ページを超える叙述にわたって一貫しており、この長大な本を読みといていくためのアリアドネの糸となっている。」[海老坂武, 2013, ページ: 175]

本稿前述した日本文学全体を統一して理解する体系の基軸として選んだのが「時間」と「空間」であると海老坂氏が指摘する。この点から見ても、『日本文学史序説』の後に書かれた最後の著作『日本文化における時間と空間』とのつながりが明らかである。そしてその基軸は『日本文学史序説』においては「土着の世界観」という表現になる。アリアドネの糸は海老坂氏から見ておそらく加藤周一が自らの言葉で綴った「精神的なもの」である。「精神的なもの」はつまり「時間」と「空間」を含めた包括的な見方の世界観であると考えられる。

鷲巣力は平凡社に入社当初から林達夫を担当した元編集者で、『加藤周一著作集』の編集を携わり、加藤周一本人と長年付き合ってきた。彼は加藤周一の文字だけではなく、日頃の間接をよく観察してきた立場である。

鷲巣力は世に広くゆきわる加藤周一に対して特徴としてとらえる「早熟」、「理知的」、「合理主義的な思考」、「科学的思考」、「西洋志向」、「非政治的態度」は間違いではないが、一面に過ぎないという。

「ひとことでいえば、「理」の人にして「情」の人」だった。かくのごとく、相反するふたつの側面をもっており、その両側面を二つながらに理解しないと、加藤を理解したことにはならないのではなからうか。」[鷲巣力, 2012, ページ: 10]

そして加藤周一にとっての知は二つあるという。「ひとつは感覚的経験である。」「日常的暮らしのなかで必要な知識は、おおむね感覚的経験によって根拠づけられる。」もう一つは「格物致知または理論実証主義」であるという。しかも知識は増えれば増えるほどよいものとは限らない。

鷲巣力はこう指摘する。

「知識人としての「知識」は尊重する。しかし、「知識」をけっして絶対化しない。その有効性についても留保する。何事についても、ひとつの考え方や知識を絶対化することが、加藤の場合には見られない。この抑制は、加藤の思想と行動の根本にある「価値相対主義」と深く関わっているに違いない。」[鷲巣力, 2012, ページ: 291]

さらに価値相対主義は文化的多元主義でもあると指摘する。

「自分の信念を守るためには、他人の信念も尊重しなければならない。こういう考え方は「価値相対主義」ともいえるが、国や地域の文化の水準で考えれば「文化的多元主義」が導き出されるだろう。「文化的多元主義」とは、多種多様の文化は、それぞれ固有の価値があり、どの文化が優れているということがなく、したがって、特定の文化に同化させたり、融合させたりすべきものではない、という考え方である。「文化的多元主義」といういい方が一般的になったのは、それほど古いことではないにせよ、一九五〇年代前半に書かれた加藤の一連の「雑種文化論」は、「文化的多元主義」の範疇に属するだろう。」[鷺巣力, 2012, ページ: 301]

そして加藤自身が明示した自分の立場を説明するための五つのキーワード「言葉」「知識」「信念」「政治」「美」の中で、「美」はほかの四つの価値と拮抗するほどの価値であるという。凌駕ではなく、対等の意味である。そこにも価値相対主義が働いていると指摘するのである。

「美」について菅野昭正氏も言及したことがある。菅野氏が『日本文学史序説』と『日本美術の心とかたち』について加藤の思考法を「美をめぐる精神の往復運動」と指摘している。これは鷺巣氏の「美」に通じるように思える。以下引用する。

「造形美術を論じる方法は文学の場合と同じで、ある時代の世界・社会を生きた芸術家(古い時代については無名の制作者)の精神(もしくは心)が、どのようにして眼に見える形となって表現されることになるか、その造形を産み出し支えるものに解析の視線を集中することでした。それはしかし一方通行ではなくて、逆に形から心へと道筋をたどる手順と両立していました。そこには、美をめぐる加藤さんの精神の往復運動が、厳密さと柔軟さとの均衡をとりながら生き生きと活動している印象があります。」[菅野昭正編, 2011, ページ: 16]

加藤周一の「価値相対主義」にしても「美」にしても、明らかに彼の思想の「柔軟性」が見られるだろう。その「柔軟性」はまさに一種の共通する本質的な精神があつてこそ、初めて「形式的」、「表象的」なものに妥協できるものなのである。

加藤周一を知の巨人と称する一方で、彼を批判する声も出ている。主な批判は「日本的なもの」に対する「日本的」のアレルギーである。戦後の日本では中国と韓国の輿論に劣らない程に「日本的」という表現は敏感語になった。確かに加藤周一の「雑種文化論」『日本文学史序説』の戦争体験と日本人としての反省や批判という背景を忘れてはならない。我々読者には加藤周一の立脚した地平線と時代の段差があるのである。段差を無視した読み方をすれば、彼のテキストを単に日本文化論として論じてしまうという問題が生じてしまう。そのような批判的な側面をも持ち合わせる成田龍一の加藤周一論を覗いてみる。

成田龍一は加藤周一の主題のひとつである「日本的なもの」の考察は日本文化論、アイデンティティ論となっていると指摘する。また自明の前提としての日本の定義はときに応じて異なることや日本論が日本の特殊性を謳いあげナショナリズムと結びつく傾向がまだ強いと指摘する。更にグローバリゼーションの時代では「特殊性に連動する特徴をいいつつ、普遍性との緊

張感を保ち、「日本」を絶対化せず過剰に同化しない加藤の姿勢そのものを考察することは、きわめて今日的な課題となろう。」[成田龍一，2009，ページ：157]

また、加藤周一の大きな特徴は「過去の日本人には、このような特徴があったということにすぎない」「過去の日本人は、もういない」とする点であるという。

「現在の日本人」である「われわれ」は「一体何を望み、何でありたいのか」——「国民としての望み」を加藤は問いかける。」[成田龍一，2009，ページ：145]

「加藤は「現代がもともとめている芸術の、また人間的価値の、普遍的な根拠を、日本の状況を背景として築こうとする仕事に、はじめて具体的な可能性が出てくる」「孤立した価値を維持することはできず、我々がたとえわずかでも何かの価値をつくり出すとすれば、その価値は普遍的な価値でなければならない」と述べているのである。普遍との緊張関係で「日本的なもの」を考察しており、自閉していないのみならず、たえず軸自体を検討する姿勢となっており、固定化を排している。」[成田龍一，「加藤周一の「日本」『日本文学史序説』まで」，2009，ページ：146]

成田氏の指摘するこの「軸」とは加藤周一の軸であると同時に現代の日本人の軸であり、グローバル化の時代を生きる日本人の普遍性と緊張感である。この「軸」こそ「日本的なもの」である。

成田龍一氏は加藤周一がこれまでの主張をパターン化して、自らの立場を固定化するような知識人と違って、

「状況のなかでたえず自らの位置・立場を問い、検討をつづけています。動的な知識人ということが出来ます。しかも（加藤に学び、歴史の制約のもとで人間は生きることを考えあわせれば）加藤は戦後知識人として、「戦後」を主導し、「戦後」を実現していきました。しかし、その「戦後」は決して固定していたのではありません。」[成田龍一，2015，ページ：440]

「加藤の営みが示唆するのは、〈いま〉の問い方であり、その位相・形式・内容がたえず検証され、推移を重ねてきたことです。生じる課題に真正面から向き合うことによって、そこに理念が自覚されます。原理的に理念を掲げ、理念を原理化するときには現象のもつ意味——歴史的な脈を把握しそこね、恣意的な解釈に陥ってしまうでしょう。そうではなく、現象に向き合い、その意味を探り、課題をそこから導き出していく姿勢と思考方法が加藤によって実践されました。」[成田龍一，2015，ページ：440]

成田氏は加藤の「雑種文化論」とその前の加藤の戦後思想の間に「またぎ越し」がなされたという。更に「戦後の思考とは異なる思考が、いまや要請されています。「戦後」による戦後史像とは異なる戦後認識が獲得され、戦後のスタイルとは異なる実践がなされなければならないでしょう。」[成田龍一，2015，ページ：446-447]

成田氏の指摘通り、加藤周一のテキストの歴史的な脈を把握し、恣意的な解釈をしないことが大事である。そのためには加藤周一のようにたえず現象に向き合い、意味を取り出し、検証することが我々の行う加藤周一研究の方法論であるべきという。

以上のように、成田龍一の「現象」と「意味」の関係において、海老坂武の「言葉」と「精神」において、鷲巢力の「多元的」「相対的」なものにおいて、彼らが加藤周一を通してお互いに共通するものを見つけ出し、また加藤周一との間にも共通するものが存在している。それは「現象と意味」、「言葉と精神」の「転換」であり、文化を「多元的」に観察する視野であると思う。

3. 『日本文学史序説』と「土着の世界観」

1970年代に読売新聞社文化部は「日本の道」という企画を新聞紙上で行った。同年3月から8月まで予想以上の反響で十三回の延長を含めて計六十三回にわたる連載であった。日本人の意識構造と日本思想史を日本人が昇華する意味で好んで使う「道」という言葉で、「日本の道」とはいったい何かを問いたものである。連載が終わった直後に要請により出版されたのは『日本の「道」その源流と展開』[1972]という本である。連載という性格もあってか、この本は「道の再発見」と「道を拓いた人々」という二つのテーマに分けて多岐に渡る内容に言及したが、そのうちの「道を拓いた人々」では古今の日本人物を「もののふの道」「武士道の開花」「風雅のこころ」「町人の道」「変革の論理」「道ひとすじ」というジャンルに細分してそれぞれ紹介した。

おそらく同じような社会要請と関心を背景に『朝日ジャーナル』は1973年1月から1974年8月まで「文学史序説」を、1978年1月から10月まで「続文学史序説」を連載した。その連載記事を加筆訂正したのが『日本文学史序説上』(1975)である。『朝日ジャーナル』連載部分の残りに、加藤周一があらためて書いた「工業化の時代」を加えたのが『日本文学史序説下』(1980)である。加藤周一は「あとがき」において、書き始めてから完成するまで7年余りの歳月を要したと明らかにしたが、その間に執筆を余儀なく中断させられ、住まいを東京、ニュー・ベヴン、ジュネーヴへと三回も変わり、期間中『言葉と人間』(1977)、『日本人の死生観』(共著1977)を書き上げたと、遊学のエピソードを披瀝する。

『日本文学史序説』は日本文化の全体像の中で描く画期的な文学史である。画期的なところは歴史の年代順の個別叙述でもなければ、上記に挙げた『日本の「道」その源流と展開』のようにカテゴリー別の叙述でもないところである。カテゴリーを取り除いて日本文化(文学、思想)という一つの軸に密着し、歴史の時代順に配列したのである。そうすることによって日本文化の原点と変化のプロセス及び時代の様態が見える化したのである。つまり、今までの本と違って、加藤周一は、一つの座標軸を呈したことで歴史としての過去だけでなく、現在の居場所と未来の方向まで量る道具を与えたのである。

『日本文学史序説』は卓抜な日本文化・思想史として評価され、記念碑的な存在となった。その中心となる軸は日本の土着の世界観、日本文化の「不易」なもの、外来文化に対峙するときに常に古層に存在し、機能し続けてきた世界観である。加藤周一は『日本文学史序説』においてこう指摘する。

「日本人の世界観の歴史的な変遷は、多くの外来思想の浸透によってよりも、むしろ土着の世界観の執拗な持続と、そのために繰り返された外来の体系の「日本化」によって

特徴づけられる。」[加藤周一, 1975, ページ: 24]

また加藤周一が「あとがき」でこの土着の世界観の意味をこう説明する。

「著者はここで、日本の土着世界観が外部からの思想的挑戦に対して各時代に反応してきた反応の系列を、それぞれの時代の社会的条件のもとで、その反応の一形式としての文学を通じて、確かめようとしたのである。「土着」とは英語の *indigenous* (仏語の *indigène*) で、外部からの影響がなく、その国の土から生まれ育ったというほどの意味である。「世界観」(独語の *weltanschauung*) は、存在の面のみならず、当為の面(価値観)も含めて、人の自然のおよび社会的環境に対する見方を包括的にいう。」[加藤周一, 1975, ページ: 492]

更に外来の世界観について『日本文学史序説』の冒頭に加藤周一はこう指摘する。

「外来の世界観の代表的なものは、第一に大乘仏教とその哲学、第二に儒学、殊に朱子学、第三にキリスト教、第四にマルクス主義であった。この順序は、必ずしも厳密に、年代の順序ではない。仏教と儒教は、おそらく同時に、六世紀の中頃に輸入された。しかしそれぞれの世界観が日本文化に圧倒的な影響を及ぼした時期は、仏教のほうが儒教の場合よりも早い。仏教は、七世紀から十六世紀までの文化の背景として、重きをなした。儒教の影響は早くから現れて、十四、五世紀以降いよいよ強まったが、体系的な世界観としての宋学の影響が決定的になったのは、十七世紀以降である。キリスト教は、十六世紀後半と十九世紀末・二十世紀前半の、マルクス主義は両大戦間の知識層に大きな影響をあたえた。」[加藤周一, 1975, ページ: 24-25]

さらにこの四つの外来の世界観のうちに、仏教とキリスト教が彼岸的で、儒教とマルクス主義が此岸的であると指摘する。

「中国の伝統的な世界観は、インド・西欧の場合と異り、此岸的であった(老荘もその例に洩れず)。日本に印度の影響が及んだのは、中国文明を介してであり、西洋の影響が及んだのは、後の時代になってからの事である。したがって中国的世界観の此岸性は、日本の土着の文化の此岸性を保存するのに役立つはずだろう。おそらく東アジアの文明の全体について、その思想的特徴は、中国の場合にも、日本の場合にも、共通の此岸的性格であるといえるのかもしれない。」[加藤周一, 1975, ページ: 25]

加藤周一は中国と日本の共通の此岸的性格があると認めると同時に、中国思想の場合でも抽象的・理論的・包括的な性格、超越的な原理が存在すると指摘する。そういう意味ではそれが日本の土着の世界観とは対照的であるため、決定的な影響を日本文化に与えたという見方である。しかし冒頭に陳述されるこの結論的な観点は『日本文学史序説』の本文では展開されず、ほぼ最低限の叙述に留まっている。なぜならば加藤は「今はしばらくその面を措いて」おきたかったからである。その理由は恐らく自分の立脚点は日本であるため、焦点を量さないように日本だけに視線を集中したかったからであろう。

丸山真男も加藤よりもだいたいぶ前から似たような言論が見られる。アプローチは「忠誠」の意味からだが、決定的な影響を日本文化に与えた点は加藤と一致している。

「中国の古典では、「忠」という観念は、有名な「人の為に謀りて忠ならざるか」（『論語』学而）という言葉に見られるように、本来、対人道德に広く用いられており、それが政治的に適用された場合でも、『左伝』に「所謂道とは民に忠にして神に信あるなり。上、民を利するを思ふは忠なり」（「桓公六年」といい、また宋の王応麟が「君の民に於けるも亦忠と曰ふ。……聖賢の忠を言ふは君に事ふるを専らとせず」（『困学紀聞』六）と、とくに強調しているように、けっして臣下の君主に対する一方的忠誠だけを意味するのではなかった。ところが日本の封建的主従関係のなかにこの言葉が定着した場合、それはほとんど一方的に従者側からの献身的な奉仕を指すものとなった。」[丸山真男, 1998, ページ: 25]

「むしろ一般的に言って、日本の思想史において、人間または集団への忠誠と関連しながら、しかもそれと区別された原理への忠誠を教えたのは、やはり中国の伝統的範疇である道もしくは天道の概念であった。」[丸山真男, 1998, ページ: 29]

加藤周一も丸山真男も中国の古典思想が日本文化に与えた影響を肯定し、中国の場合は「原理への忠誠」を重んじるのに対し、日本の場合は「人または集団への忠誠」を重んじるのである。しかし両者はいわゆる此岸的な性格を持つところは共通している。なぜならば儒学も現世主義的な包括体系であり、死後の世界を問わないのである。日本文化においても仏教などの影響があるにも関わらず、来世ではなく現世に関心を寄せる傾向が強いのである。この点に関して本稿では詳細まで触れられないが、加藤周一は『日本文学史序説』で詳しく例示する。

加藤は中国思想を意識しながらも、日本を対象に限定した。「日本的なもの」への探求は彼の生涯を貫くテーマである。雑種文化論を含めた加藤周一生涯の関心は日本人の心の奥底、固有の土着的世界観の探索であった。そのような視座の延長線に、日本人が外部の思想的挑戦に対していかに反応し、変質していったのか、従来の狭い文学概念を離れ、壮大なスケールのもとに日本人の精神活動のダイナミズムをとらえ、土着の世界観の機能を場面別に説明しようとしたのは『日本文学史序説』である。

『日本文学史序説』において加藤は外来思想、土着の世界観、外来思想の「日本化」というパターンを示し、土着の世界観が歴史を牽引する力の主体であるとした。外来思想を「流行」の代表とし、土着の世界観を変わらない性質を持つとし、「日本化」された外来思想はその両者の中間であると指摘した。つまり、日本化された外来種の世界観は中間的なものであるという観点が明確である。この「土着の世界観」を説明するかのよう、同書には「世俗化」「人情」「現世主義」などのようなよく似た表現が各章節に散見できる。

例えば、その中間的な日本文学の各段階の例として加藤周一は『日本霊異記』、『十住心論』、『往生要集』を外来思想の文学とし、『古事記』、『万葉集』、『古今集』、『今昔物語』を土着の世界観の文学とし、その中間に『源氏物語』を位置づけた。つまり、万葉集の時代は土着の世界観のまま、その後の平安時代に日本の転換期がやってくる。それ以降の日本人もどの時代においてもその時代の外来思想、外来文化に対して土着の世界観を原点に「中間的」な反応をしていたということである。

加藤は史の流れと各時代を四つの転換期を設定して構成している。「最初の転換期」は平安時代、二番目に来る「再び転換期」は鎌倉時代、続いて16世紀半ばから17世紀の半ばの100年間に「第三の転換期」、そして「第四転換期」は明治維新を境界線とするのではなく、明治維新の前と後を含めて100年間に現代までの最後の転換期とした。

特に加藤周一は第三の転換期を二重の転換期であると言う。

「西洋の影響が初めて及んだ時期であると同時に、宋学（儒学）の日本化が発生した時期でもある。仏教の世俗化、儒学の現世主義、町人文化の義理と人情の二重構造の出現、現世享楽主義的な大衆文化の興起が同時発生したのであるという。加藤は「宋学の非形而上学化こそは、まさに宋学の「日本化」にはかならなかった。17世紀末、元禄時代はその頂点にある。」[加藤周一、日本文学史序説 下、1980]と指摘する。

加藤によれば、宋学の日本化という独自の進化の過程は、実に中国の非主流の儒学思想の日本への浸透化としても読み取れる。もちろん、この過程の中で、日本は宋学を受け容れられる土台を備えていなければならないということである。その土台は日本文化固有の土着世界観なのである。

そして最後の転換期は明治維新前後の100年位、現代まで及んで断絶する見方をせずに、一つの転換期として見なし、第四の転換期と呼ぶ。加藤周一は第四の転換期についてこう描く。

「武士知識人・儒者の朱子学的世界の分解過程は、十八世紀を通じて進行し、その原動力が、本来現世的・实际的な土着世界観に係っていたらうということ、すでに述べた。伝統的日本の世界観の能一つの側面は、美的価値の強調である。他方では儒者から詩人の独立する傾向もまた強まりつつあった。かくして宋学の形而上学体系は、早くも十八世紀の末に、政治哲学・個人倫理・医術・詩文などに分解されようとしていたのである。しかしその分解過程に西洋の学問・技術との対決が演じた役割は、まだ小さかったといえるだろう。」[加藤周一、1980、ページ：223]

イギリスは中国でアヘン戦争のような武力行使をしたことが日本に伝わると、

「中国文明の絶対的優越という信念はゆり動かされたにちがいない。もはや儒学の体系も、その全体が究極の権威ではなくなり、そのどの部分が役立つかという問題が意識されるようになった。かくして十九世紀の前半に完了した朱子学的世界の分解過程は、いつくかの異なる方向を生みだしたように見える。」[加藤周一、1980、ページ：224]

加藤周一は近代における朱子学世界の分解過程を本居宣長から吉田松陰まで、福沢諭吉から幸徳秋水まで、ほかにも多彩な人物を取り上げて近代の転換として例示した。例えば、福沢諭吉について、

「福沢は、本居宣長が「漢意」を排したように、「儒魂」を一掃しようとし、「国学」を作ったように、「実学」すなわち英学を教え、『古事記』の世界に忠実であろうとしたように、その個人主義＝自由主義的な面においても、植民地帝国主義的な面においても、西洋中産階級社会の手本に、忠実であろうとしたようにみえる。」[加藤周一、日本文学史序説 下、1980、ページ：304]

「世界観における兆民と福沢との共通点は、両者が超自然を認めず、全く世俗的な立場をとったことであり、その意味で、日本の伝統的土着世界観から出発していたということである。彼らの「西洋」には、神がなかった。」[加藤周一、日本文学史序説 下、1980、ページ：314]

加藤周一が取り上げたほとんどの人物は「現世的」または「此岸的」な「土着の世界観」をベースにした外来思想に対する反応として説明した点において共通している。加藤周一の例示した日本人はみんな言葉を媒介した思想の伝達者である。彼らは異文化接触の最前線に、ある時に言葉を武器に、ある時に言葉を回避し、同時に日本語、漢文、または西洋言語の間で駆け回り、古今東西を遊走し、一生懸命求めたものがある。それは同じ日本人である加藤周一自身に通じる一種の「土着の世界観」であろう。

ここで加藤周一の良き友人、丸山真男をもう一度登場させよう。丸山は1960年の論文「忠誠と反逆」を書いた。この論文は『近代日本思想史講座』第六巻「自我と環境」に収録されるが、冒頭を引用する。

「本巻は全体として近代日本における自我とそれをめぐる大小さまざまな社会的環境との間に行われる適応・対決・疎外などの諸関係が、思想的に明治以来どのように日本人に受け止められて来たのかを解明することを主な狙いに行っている。したがって、この稿では忠誠も反逆もなにより自我を中心として、——自我を超えた客観的原理、または自我の属する上級者・集団・制度など、にたいする自我のふるまいかた、として捉えられる。忠誠 loyalty の概念を拡張すれば、自我のそれ自らへの忠誠——いわゆる自己にたいする忠実さというような意味も含めることが可能であるが、右の観点からしてそれは少なくとも直接的な考察の対象にならない。」[丸山真男、1998、ページ：9]（9ページ）

丸山真男の言う「自我」が社会的環境に対する「適応」「対決」「疎外」の反応は加藤周一の言う「土着の世界観」が外来思想に対する受容のパターンと類似する文脈がある。加藤周一が丸山を理解するための補助線であると多くの学者に指摘されてきたように、丸山真男も加藤周一を理解するための補助線である。丸山のこの「自我を超えた客観的原理」（ふるまい）は加藤周一の「外来思想の受容の原理」（一連の反応）とも理解できよう。ただ、違うのは丸山の「自我」はより能動的で、加藤の「外来思想の受容」はより受動的である。それにも関わらず、丸山の「日本人の自我」は加藤の「日本人の土着の世界観」と同一物までは行かなくても同一人間に共存する精神的なものであろう。そして複数或いは無数の日本人の「自我」又は「土着の世界観」が日本文化の「土着の世界観」を構成したのに違いない。

以上述べてきたように、加藤周一は『日本文学史序説』を通して日本人の土着の世界観を縦軸に、時代の変遷を横軸に、壮絶な絵巻を広げた。本稿はその壮絶な絵巻を丸ごと扱う紙幅がないため、意を尽くさないままではあるが、ここで打ち切ることにする。

おわりに

付言するものとして、加藤周一は『日本文学史序説』補講』において日本の「第五の転換期」

ついでの話を用いた。

「明治維新のあとに明治体制が三〇〇年続けばいままでと同じパターンですが、今度は敗戦になったから、失敗を通しての半ば強制的な転換期があらわれたと思う。「強兵」で失敗し、「富国」で失敗したから、「今度は文化だ」というのはちょっと簡単すぎる。そう簡単にいかないと思います。」[加藤周一、『日本文学史序説』補講, 2012, ページ: 281]
加藤は「富国」「強兵」の次に「文化国家」へ転換するというのはできないと話した。その理由についてこう指摘する。

「ひとつは、「富国」も「強兵」もそうなのですが、政府だけではできないけれど、政府のやれる範囲はどちらも広い。ところが文化について政府がやれる範囲は大学の予算をふやすくらいのもので、そうたいしたことはできない。だからちょっと違う。政策的目標にはなりにくい。フランスの文化予算は日本と比べものにならないほど大きく、予算に占める割合も高いんです。ある意味でフランスは文化国家に近いといえるかもしれません。」[加藤周一、『日本文学史序説』補講, 2012, ページ: 281]

「日本で国民的目標が文化だというわけにはいかないもので、まあ、ちょっと方角なしの転換でしょう。どこに転換するのか、よくわからない。」[加藤周一、『日本文学史序説』補講, 2012, ページ: 282]

加藤は「第五の転換期」がどこに転換するのか予測できないと言い残したのである。転換のハンドルを握るのは現代を生きる日本人であろう。グローバリゼーションの時代において日本をどう転換していくのかは個々の自我の「土着の世界観」から生み出されるものだろうか。

もう一つ、『日本文学史序説』補講の加藤の話を用いた。これは海外の『日本語文学史序説』に対する反応の質問に答える際にフランス語版の一冊に序文を書いてくれたエティアンブル教授の見方を取り上げて、「方法上のマルクス主義」の影響が明らかだが、「教条主義的ではない分析の仕方を歓迎する」とされた話の後に自分が「左翼」と見なされていないことについての話である。

「それは一般知的世界に触れた話ですが、大きく見れば、私自身のことはふれないとしても、丸山真男は日本の「超国家主義」の、あるいは徳川時代の政治思想史の分析で、国際的な権威です。すべての研究者が読むべき代表的な古典の一つです。しかし、丸山さんの方法を応用してアメリカ史を書き直すとか、ヨーロッパ史を解釈し直すというようなことはちょっとないと思う。それが丸山さんとマックス・ヴェーバーとの違いです。ヴェーバーはドイツの話をしていただけではない。ドイツ史のための古典ではなく、世界の考えられるすべての宗教社会学のための新しい方法を提供したのです。丸山真男以降もう一歩先まで行けば、日本の話ではなくて、政治史とか思想史という分野で、世界に影響を与えるような方法を日本から作りだしていくことになるでしょう。しかしそういう兆候はまだない。社会科学の分野ではそうっていないんです。最高峰が丸山さんで、見事に日本を説明しているということです。」[加藤周一、『日本文学史序説』補講, 2012, ページ: 313]

このように加藤は日本人であるだけに日本人を相手にした話し方もなかなか日本式であるが、含意深い文脈を読めば、加藤自身が丸山のことを大変意識していることがわかる。自分と丸山の違いを誰よりわかっていた加藤は丸山と同じく日本を出発点にしたが、目指したい理想は丸山と少し違ったのである。その理想はマックス・ヴェーバーのような普遍的な新しい方法論で、日本文化だけではなく、日本文化以外の世界の文化まで説明できることではなかろうか。『日本文学史序説』の「土着の世界観」は果たして日本人だけに特有なものなのか、それとも普遍的な意味を持つものなのか、これらは現代人のわれわれが考えていかなければならない問題であろう。

引用文献

- 丸山真男. (1972). 『日本の思想 6』. 『歴史思想集』. 筑摩書房.
- 加藤周一. (1975). 日本文学史序説 上. 筑摩書房.
- 加藤周一. (1980). 日本文学史序説 下. 筑摩書房.
- 加藤周一. (2012). 『日本文学史序説』補講. ちくま学芸文庫.
- 加藤周一, 中村真一郎, 福永武彦. (1946). 1946: 文学的考察. 真善美社.
- 海老坂武. (2013). 加藤周一——二十世紀を問う. 岩波書店.
- 丸山真男. (1998). 忠誠と反逆 転形期日本の精神史的位相. ちくま学芸文庫.
- 菅野昭正 編. (2011). 知の巨匠 加藤周一. 岩波書店.
- 成田龍一. (2009). 「加藤周一の「日本」『日本文学史序説』まで」. 『現代思想 総特集 加藤周一』.
- 成田龍一. (2015). 加藤周一を記憶する. 講談社.
- 孫歌. (2009). 文学的位置. (China 叢書 global cultural structure in the new century and humanity construction inThe, 編輯) 中国: 山東教育出版社.
- 葉渭渠. (2000). 「日本文学史序説」をめぐって——中国・韓国の視点から. 第11回日本研究国際セミナー 2000——世界における日本研究と加藤周一. 福岡ユネスコ協会.
- 林屋辰三郎, 上田正昭, 山田宗睦 編. (1972). 日本の「道」その源流と展開. 講談社.
- 鷲巢力. (2012). 「加藤周一」という生き方. 筑摩書房.
- 约翰惠特尼霍尔. (2013). 日本—从史前到现代. 中国: 商务印书馆.